



理事長挨拶

理事長
本庄 照子

本庄国際奨学財団の奨学生の皆さん、OB/OGの皆さん、こんにちは、お元気ですか？世界各地にいらっしゃる皆さんが、それぞれの地でどのように過ごしていらっしゃるのか、いつも思いめぐらせています。

公益財団法人本庄国際奨学財団は1996年12月25日に設立され、1997年より第1期生を採用しました。2016年の今年には20期生を迎えました。世界各地の平和と発展を願い、将来その国のリーダーとなりうる学生に対して支援をする姿勢は、設立当初から変わりません。そのために研究分野や国籍を問わず誰でも奨学金に応募できる体制を取っております。2016年までに奨学生となった外国人留学生と日本人の学生は76か国、約600名になりました。

本庄国際奨学財団では奨学金支給のみならず、様々な活動を行っております。東日本大震災の被災者への訪問活動は4年目に入りました。今年の7月には盛岡で「震災復興支援フォーラム」を岩手県立大学と共催しました。「HISFワークショップ」は奨学生OB/OGを講師として、様々な

分野の研究をわかりやすく楽しくお話していただく講演会です。奨学生とOB/OGだけでなく一般の方も大勢参加して下さるようになり、交流の輪が広がっています。海外での同窓会も中国、台湾と同窓生の多いところから順に行っております。「ぜひ私の国で開催を！」とぜひ手を挙げて下さい。今年度も様々な活動を行ってまいりますのでぜひ積極的に参加して下さい。

2017年8月19日～20日には、20周年記念国際シンポジウムを東京で開催いたします。シンポジウムの準備のために協力をしてくれているたくさんの中にある同窓生たちに心より感謝申し上げます。シンポジウムには全員が集まってくれることを期待しております。

今後も一人でも多くの意欲に燃えた若い人たちに支援を続け、国際平和のために力を尽くしてまいりたいと考えております。また、皆さんが志を高く持ち、母国と日本の懸け橋となりますよう、これからも応援し続けてまいります。

目次

01 理事長挨拶 目次	07 ハワイからの手紙 — ミハイル・ロマンチュク 日本の春2015～新しい文化に出会って
02 20周年記念国際シンポジウムのお知らせ 公募案内 / 財団の概要	08 ニューヨークからの手紙 — 藤谷 謙司 アメリカの医学部教育と日本
03 OB・OG寄稿 — 根木 昭英 パリ大学の7年を振り返って	09 SENPAI! インタビュー VOL.4 ① 鄧 本祥 ② 松山 武 オジョス ③ サンドラ・ミレーナ・プエンテス ④ アンドリュー・C. エリオット ⑤ 阿部 雄一 ⑥ 李 映昊
04 特集 ソフィア・スイダサリ 日本留学12年間の足跡を追ってみた	12 温故知新 / お知らせ / 謝辞
05 奨学生寄稿 — 福元 華織 思い込み — マックスプランク研究所のワークショップから学んだこと	13 1年間の活動
06 奨学生寄稿 — 大橋 匠 掛け離れた2つの軸を究めるために	15 19年間の軌跡 / Journey of 19 years

Contents

17 Words from the President	23 A letter from Hawaii — Mikhail Romanchuk Japan Spring 2015: Struggles and Accomplishments In a New Culture
18 Notification of 20th Anniversary International Symposium Guideline for Scholarship and Research Fellowship in 2016~2017 / About Us	24 A letter from New York — Kenji Fujitani Medical Education in US and Experience in Japan
19 HISF Alumni in Action — Akihide Negi Looking back on Seven Years at University of Paris	25 Senpai! Interview vol. 4 ① Deng Ben-Shiang ② Matsuyama Hoyos Takesi ③ Sandra Milena Puentes ④ Andrew C. Elliott ⑤ Yuichi Abe ⑥ Young-Ho Lee
20 Special Feature Walking with Sofya Suidasari, tracing her 12 years in Japan	28 Visiting Old, Learn New / Notifications / Acknowledgement
21 Scholars in Action ① — Kaori Fukumoto Beliefs ~What I learned at the workshop in Max Planck Institutes	29 Timeline 2015-2016
22 Scholars in Action ② — Takumi Ohashi To obtain two different axes	

カバーデザイン 小淵 暁子

開催
します

～本庄正則メモリアル～ 20周年記念国際シンポジウム

2017年8月19日(土)～20日(日) 東京国際交流館「プラザ平成」

財団設立20周年を記念して、国際シンポジウムを開催いたします。参加登録を受け付け中です。論文発表分科会、フォーラム、ワークショップ、パネルディスカッションなどに参加して懐かしい人々と再び交流を深めましょう。

<http://www.hisf.or.jp/20anniversary/>



2016～2017年度奨学金・研究助成金の公募案内

奨学金プログラム

- 外国人留学生奨学金(第21期生) 【対象】日本の大学院に在籍中または入学予定の外国人留学生
- 国内日本人大学院生奨学金(第12期生) 【対象】日本の大学院に在籍中または入学予定の日本人学生
- 海外留学日本人大学院生(第21期生) 【対象】海外の大学院に在籍中または入学予定の日本人学生

海外提携プログラム

- Jack Lewis Scholarship Program (南カリフォルニア大学)
- Professor Misawa Scholarship Program (ハワイ大学)
- JMSA Scholarship Program (米国日本人医師会)
- JAA Scholarship Program (ニューヨーク日系人協会)
- CUSSW Scholarship Program (コロンビア大学)

研究助成金プログラム

- 食と健康研究助成金 【対象】健康維持に対する食品あるいは食品成分の効果を、人を対象とした試験あるいは代替試験法によって明らかにしようとする研究に対する助成。

※募集期間等募集に関する詳細は、ホームページで公表します。申請書類もホームページから取得できます。
※海外提携プログラムは、各提携先の大学または団体において募集・選考を行います。
詳細は当財団のホームページに掲載されている各大学または団体のホームページをご覧ください。

財団の概要

【名 称】公益財団法人本庄国際奨学財団
【英文名称】Honjo International Scholarship Foundation
【設 立】1996年12月26日
【理事長】本庄 照子

【目 的】
この法人は、学術研究への奨学援助および研究助成を行い、もって我が国と諸外国との教育・学術・文化における交流及び相互理解を促進するとともに、人材の育成及び教育・学術・文化の発展に寄与することを目的とする。

パリ大学の7年を振り返って

根木 昭英 (2012~2014 海外留学プログラム奨学生/日本)
Akihide Negi, Ph.D.

岡山県出身。
東京大学「多文化共生と統合人間学プログラム」特任研究員。
東京大学大学院総合文化研究科博士課程、パリ第8大学歴史・文学・社会学研究科修士課程を経て
2009年よりパリ第4大学フランス文学・比較文学研究科博士課程に在籍し、2016年修了。



2008年秋フランス留学へ

私は、財団に奨学金をいただいていた2012-14年度を含め、約七年間のフランス留学から去年帰国し、パリ第四大学にて博士号を取得しました。留学を始めたころに考えていたよりはるかに長い留学生活になってしまいましたが、無事論文を提出して財団との約束を果たすことができ、また博士論文のなかで、それまでに自分が学んできたことは出し切れたかなという思いもあるので、ホッとすると同時に、とても満足しています。

おもえば留学を始めたのは、日本の博士課程で二年次に進学した2008年の秋でした。留学前にはユーロ高のピークで、先々の経済的な見通しも立っていなかったため、いったいいつまで留学できるのだろうかと不安もありつつの渡仏だったことを覚えています。最初の一年間では、日本の修士課程にあたるMaster II課程に登録して、あらためて修士号を取り直しました。単位取得のための講義参加とレポート作成、そして論文の執筆に追われ、文字通りあつという間の一年間でした。博士課程に登録した二年目以降にはすこし時間の余裕もできて、学会発表などを行うと同時に、博士論文の構想を練るためのあらたな読書をし、また、フランス人の友人と毎週の会話練習をしたり、ときにはほかの国に旅行したりもできるようになりました。

文系博士課程の場合、日本でもフランスでも、何時から何時までは研究室でといった形で拘束されることはほとんどありません。つまりは完全な放任で、いくら書き進めたものを指導教官に見せて助言をもらうこととなります。自由といえば自由なのですが、どういった章立てで論文を構成するか、最初のころはかなりの手探り状態でした。その後、博士課程の友人たちと議論したり、ほかの人の博士論文を読んだりするなかで構想も固まっていき、じっさいの執筆に移ったのですが、着地点は分かっているにもかかわらず途中の論理が繋がらないことも多く、大学の登録年限を考慮して焦りながら、昼も夜もなく執筆するという日々が論文の提出まで続きました。いま振り返っても大変な毎日でした。と同時に、研究のことだけを考えることのできた、ほんとうに貴重な時間だったと思います。

サルトル研究

研究の具体的な内容としては、私は日本の修士課程のときから、フランスの作家ジャン＝ポール・サルトル(1905-80)の研究に取り組んでいます。研究内容を一言で要約するのは難しいですが、サルトルがジュネやマルルメ、フローベールといった他の作家や詩人たちを対象として書いた批評群の中に、見えにくい形においてはあるが、美学と倫理をめぐる一貫した思想体系が見いだされるのではないかと、そしてこの体系が、彼の代表的な文学論である『文学とは何か』(1947)とは多くの点で異なっているのではないかとの見通しのもと、この潜在的な美学・倫理体系を浮き彫りにするべく試みました。いわば、サルトルが理論書としては書き残すことのなかった文学論を、「第二

の『文学とは何か』として再構成する作業に取り組んだこととなります。作家・哲学者であると同時に、政治的活動にも身を投じたサルトルのテキストはつねに多面的で、実際の博士論文執筆においては、文学だけでなく、キリスト教神学やドイツ現象学の受容、マルクス主義との関係や絵画をめぐる思索といった多岐にわたるテーマを扱うことになりました。

博士論文を終えて帰国した現在は、フランスでの博士論文出版を目指して論文の内容を再検討すると同時に、常勤・非常勤のアカデミックポストを探しているところです。これまでは狭い専門領域のなかで、いかに専門家を納得させられる議論を組み立てるかが課題でしたが、今度は、もっと広い領域について、学生の方々にできるだけ分かりやすい説明ができることが目標となります。いままでとは180度近く違うことなのでまだまだ修行が必要だと実感しますが、徐々に経験を積み重ねていきたいと思います。

失敗を恐れずチャレンジを

というわけで、ここまで少々あたりさわりのない内容になりすぎてしまった気もしますが、自分の経験から、現在留学中の博士生の方が多くであろう読者の皆さんに、何か助言めいた事が引き出せるとすれば何でしょうか。一つに絞って述べるとすれば、自分が外国人だということをあまり気にせず、積極的に学会発表や査読に挑戦して行ってほしいということになると思います。文系の場合、手元に実験データなどがあるわけではなく、自分の解釈一本で勝負しなければならないため、ネイティブの研究者に比べて不利だと痛感することも留学中には多かったです。それでも、これだと思って行った発表や論文発表では、現地の研究者も真摯な検討を加えてくれましたし、結局、そうしたことの積み重ねで、自分の研究が認められていく気がします。ですので、外国人ゆえの失敗をおそれず、いろいろな機会に継続的にアプライしていくことには大きな意味があると感じた次第です(もちろんこれは、留学中にかぎったことではないので、このさきの自分の継続的な目標でもあります)。

最後に、即効的な実用性からは程遠い私の研究に援助を与えてくださった本庄財団に、あらためてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。



博士学位審査の様子

日本留学12年間の足跡を追ってみた

ソフィア・スイダサリ (2013~2016 外国人留学生プログラム/インドネシア)
Sofya Suidasari, Ph.D.

インドネシア・ジョグジャカルタ出身。アリメント工業株式会社で研究開発担当。2004年高校生の時に交換留学プログラムで初来日。2016年広島大学大学院生物圏科学研究科博士課程修了。



2016年2月、インドネシア出身のソフィア・スイダサリさんが10年以上にわたる日本での留学生生活を終え、4月から日本の会社で働くことになりました。そこでソフィア(以下敬称略)が過ごした足掛け12年の奈良-東京-広島での留学生生活を、それぞれの地に彼女にまつわる方々を訪ねて、その時々彼女の彼女に関する証言を拾いました。日本留学が彼女の人生にどのような影響を与えたのかを探ると同時に、外国人留学生の留学生活の一つの事例を紹介します。

古都奈良の高校留学

2004年、奈良県の郡山高校へ10か月の交換留学生としてやってきました。同じ高校に通う生徒の家庭から、ホームステイの受け入れ家庭を募集することになっており、三人の同年代の子供たちと、お父さん、お母さん、おばあちゃんの6人家族である青木さんがソフィアのホストファミリーとなりました。お母さんは管理栄養士をされており、その後栄養学の道に進んだソフィアのキャリアに最初に影響を与えた人です。おばあちゃんは現在90歳で現役の書道の先生です。仕事で忙しかったお母さんよりも、ソフィアと接する時間が長かったのでたくさんエピソードを覚えていました。インドネシアでたくさんの兄弟姉妹の長女として育ったソフィアは、姉御肌であり、青木家の三人の子供たちに呼び掛けて、交代でトイレやお風呂の掃除をすることにしました。青木家にはそれまでなかった習慣でしたが、ソフィアさんが帰国した後子供たちの掃除習慣は続きました。

郡山は古い町屋が立ち並ぶ伝統を重んじる町です。町内の神社で行われる秋祭りやお餅つき大会にはよく参加して、近所の方々に大変な人気者でした。そして学校が始まってしばらくして、いつもより早く家を出る日が時々ありました。クラスのだれかの誕生日にあたり、同級生たちが登校する前に、黒板いっぱい「Happy Birthday!」の文字と絵を描いていたのです。書いてもらった同級生はうれしかったと思いますが、ソフィアのお友達を作る作戦も並大抵の努力ではなかったでしょう。

「That's the way I am」(これが私のやり方よ)ソフィアからこの言葉を教わった親友のミキさんは、社会人になってからもつらいことがあると思出すそうです。(Celine Dionの歌のタイトルですが)まわりと違うところがあっても、正しいと思ったことはやり通す、そんな意味です。

ソフィアはそのころから「大統領になる」と周囲に語っていました。ホストファミリーの青木さんも担任の前田先生も親友のミキさんもその言葉を覚えていました。その心は、「インドネシアを変えたい」。17歳で日本を知り、外から母国を見て、ソフィアはどんなことを思い、決意したのでしようか。



右:広島大学 加藤久教授



ホストファミリー 青木さん一家



奈良県立郡山高等学校

東京の栄養専門学校

1年足らずの高校留学を終え、いったんインドネシアへ帰ったソフィアは、再び国費奨学金を得て、日本へやってきます。日本語学校を経て、東京池袋の栄養専門学校へ入学します。専門学校では、成績表に「C」がひとつでもあれば即座に奨学金が打ち切られ、自費で授業料を賄うことはできないためインドネシアへ帰らざるを得なくなる。ソフィアは必死でした。まじめに勉強しない同級生を見て、「親に授業料を払ってもらっているのに勉強しないなんて信じられない」と思っていました。授業を妨害するような生徒もいて、「勉強しないなら教室から出てください」とたまらずに叫んだこともあります。「だって私は日本で勉強を続けるために、必死なんです!」栄養学の専門用語はとても難解で、1ページ読むのに一時間半もかかることもあったのですが、担任の後藤先生がよく補習に付き合ってくれました。このような環境で栄養学の道を歩き始め、インドネシアに学校給食を導入したい、栄養学校を作って、医療や教育を向上させたいと決意しました。そのためには、人脉を作ることが大切だと思い始めました。そして大学のために移り住んだ広島でASEAN留学生協会を作るに至ったのです。

広島大学で博士を目指す

2年間の栄養専門学校を修了して、広島大学に進学。そこで出会ったのが食品科学の加藤先生。議論好きの個性派先生です。加藤先生:「ソフィアはインドネシアの大統領になるんですよ」加藤先生の開口一番に驚きました。ソフィアは10年前に郡山高校で言っていたことを、ここでもまだ言っていた。そしてその真意はより具体化し加藤先生によって客観的に分析されていたのです。加藤先生:「彼女は国のリーダーになる人ですよ。人に使われるタイプじゃない。学校を作りたいとも言っていたね」ソフィアは研究者としてどうですか?加藤先生:「彼女は面白くないことは絶対にやらない。自分が納得することしかやらない。直感的に研究テーマや実験が面白いかどうかを判断している。科学の世界では本物を選ぶ直感や山勘のセンスが結構ものを言います。重要かどうかは二の次、大切なことは面白いかどうか。そしてよく議論することが大切。彼女は言いたいことをはっきり言う。自分の頭で考えられる人。こういう人が新しい分野を作ってゆくとする」

奈良、東京、広島でお世話になったたくさんの方々ソフィアのこれからの活躍に期待しています。がんばってね!

(文: 河島伊都子)



福元 華織 (2014~現在 海外留学プログラム/日本)
Kaori Fukumoto

山口県出身。
2012年県立広島大学生命環境学部卒業。
岡山大学大学院環境生命科学研究科を経て2014年よりケルン大学博士課程に所属し、マックスプランク研究所植物微生物相互作用グループで植物ホルモンの拮抗作用の研究をおこなっている。

奨学生寄稿

思い込み —マックスプランク研究所のワークショップから学んだこと—

研究から離れたワークショップ

私が所属するドイツのマックスプランク研究所では年に数回ほど自由参加のワークショップが行われる。ワークショップの内容は様々で、プレゼンテーションスキルやキャリアプランニングなどの講座を、二日から四日かけて勉強する。日本ではワークショップに参加したことがなかったので知らなかったのだが、ワークショップというのは受講者全員で議論したりグループになって模造紙に絵や図を入れながら意見をまとめたりのアクティビティが中心の授業である。それが私にとって新鮮であり、毎回ワークショップに参加するのが楽しみで仕方がない。また、研究以外のことで議論し意見をまとめて発表する機会は滅多にない貴重な体験であるため、私はこれまで多くのワークショップに参加してきた。その中の一つにコンフリクト(対立)マネジメントという講座があった。

コンフリクトマネジメント講座

コンフリクトマネジメントの講座では初めに、数字占いゲームを行った。それは、初めに講師がアメリカのとある場所で占いに使われるという10本の棒を見せ、それらを片手でつかみ四角い枠の中に垂直に立てたあと手を放し、枠の中を見ながら数字と占いの結果を言う。例えば「3、明日の天気は晴れ」と言い、また次に棒を放した時には、「1、今夜のおかずはジャガイモのフライ」と言う。受講者は講師が棒を放した後、何の数字を言うかを当てると言うゲームだった。私は、このスピリチュアルな棒が倒れたときに作り出される形の規則性が分かれば数字を言い当てられると思い、頭をフル回転させて棒の位置や重なり方を観察していた。しかし、やはりただの棒、特にこれといった規則性は発見できなかった。次に占いの結果に着目してみたが、数字に関連するような情報はなかった。ここで講師が、枠の中が重要であるというヒントを出したので、枠の中ということとはやはり棒が関連するのかと考えたが違う。そこで棒を無視して枠の中を見ると、講師の指先が枠の中に入っていることに気がついた。そしてすぐに枠の中にある指の数が数字を示していることにも気がついた。私は完全に引かかった。棒や占い

は、枠の中にある指先から気をそらすためだけに使われていたのだ。講師はこのゲームから、私たちが思っていることは本当に真実なのか、実は必要な情報が見えていなかったり、思い込みをしていたりすることもあるのではないか、視点を変えてみると違う答えが見えてくるのではないかと、ということを強調した。

「思い込み」の明暗

そして、受講者は自身のコンフリクトの経験談を元にどのようにコンフリクトを解消するかを考える取り組みを行った。コンフリクトと一口に言ってもそれは自分とのコンフリクトと他者とのコンフリクトに分けられる。自分とのコンフリクトは、自分にとって好ましい選択肢または好ましくない選択肢から一つを選ばなければならないとき、あるいは好ましいものを選択すると同時に好ましくないものもついてくるときに起こる。例えば、自分はこのようにしたいという思いと仕事や家庭で求められている自分の役割との間にギャップがあるときに自分とのコンフリクトが生まれる。他者とのコンフリクトは、異なる意見やネガティブな感情を持った依存関係にありながら、仕事やプライベートでの関わりを持つ他者との間に発生する。他者または自分とのコンフリクト経験を掘り下げて考えていく過程で、思い込みというのは非常に厄介だと感じた。他者の気持ちを自分の視点で考えて思い違いをしたり、他者の必要としているものに気づかず自分本位になっていたり、自分自身でできないと決め付けたりすることが、コンフリクトを生み出す要因の一つになっていると思った。それはまさに、思い込みに囚われて数字占いゲームに引かかった自分自身を映し出しているようであった。

とはいえ、思い込みは悪いことばかりではない。ポジティブな思い込みは人生を豊かにしてくれることもある。私がドイツで博士論文研究を始めようと思ったきっかけも、自分ならできるという思い込みだった。重要なのはその思い込みが事実を反映しているのか、自分にとってプラスに働くのかマイナスに働くのかを吟味することだろう。



大橋 匠 (2014~現在 国内大学院生プログラム/日本)
Takumi Ohashi

長野県出身。
東京工業大学大学院総合理工学研究科物理電子システム創造専攻博士課程では半導体の研究をおこなう一方、同大学院環境・社会理工学院技術経営専門職学位課程にも所属し社会言語学や認知心理学の観点から教育に関する研究をおこなっている。

奨学生寄稿

掛け離れた2つの軸を究めるために

新興国で教育に携わることを目指す私は、大学での半導体研究と教育系NPO・学生団体の活動を通して「科学技術」と「教育」という軸を強固にするべく、博士後期課程を邁進している。一見関係の無いような2つの事柄を堂々と「夢」と語り、そして実現に向けて一歩ずつ進んでいけるのは、本庄国際奨学財団の皆様にご支援をいただいているおかげである。その感謝の意を込めながら、私の特徴的な活動である「教育」という軸についてお話をしたい。

日本×バングラデシュ姉妹学級プロジェクト

ワークショップや進路講演会などの2年間の活動を通して、世界各国の子供たち約3,500人にリーチすることができた。その中の1つ、ものづくり体験を通して国際交流を図ろうと企画した「日本×バングラデシュ姉妹学級プロジェクト」では、日バの子供たち750人超にロボットを使ったワークショップを実施した。新しいことに戸惑いながらも、笑顔でロボット製作を楽しむ彼らの姿を見て、私も心から喜びを感じた。

しかし、充実した活動を振り返る中で1つの疑問が生じた。それは、新しい技術を知らなければその生活で幸せだったかもしれない子供たちに、日本の子供たちと同様に、最先端技術を伝えても「良い」のかという問題だ。そしてその疑問は、先進国・途上国に限らず、「何を基準に「良い」と判断して子供たちに物事を伝えるべきなのか」という疑問に変わった。よし悪しは受け次第であり、環境によっても左右されるものである。したがって、教育者は受け手の状況を正確に把握し、受け手にとって最も「良い」と思われる事柄を判断できなければならない。そのために、これまでの限定的な経験だけではなく、世界を俯瞰して、状況をより客観的に判断できる力と経験を得る必要があると考えた。



バングラデシュにて、ロボットワークショップの様子

ストックホルム国際青年科学セミナー

そのような力と経験を得るために、様々なバックグラウンドを持った学生と意見を交わそうと、世界各国から選ばれた25名の若手研究者が集う「ストックホルム国際青年科学セミナー」に参加した。このセミナーは、約1週間の日程でノーベル賞授賞式、ノーベル賞受賞者による講演などの諸行事に参加し、また、現地の高校生約500名に向けて自身の研究発表を行うというものである。

若手研究者との交流の中で驚嘆したことは、国際的な教養に非常に長け、自らの意見をしっかりと持ち発信できる彼らの力であった。それを感じ取ったのは、セミナー中のイベントの1つである倫理セミナーだ。これは、科学倫理に関する課題をグループに分かれて

議論し、結論を発表するというものである。非常に難しい課題で時間の制約があったにも関わらず、一人ひとりが自らのバックグラウンドや知識から、緻密に意見を構築しようとする姿勢にとっても感心した。それらは、常日頃から様々な出来事に対してアンテナを張りながら自分の中で咀嚼している結果であるようにも感じた。世界の潮流に関心を持とうとしていたのにも関わらず、私の興味関心の範囲はまだ非常に狭く、より広範な視野を持つ必要があることを実感した。

ノーベルウィーク中には、光栄なことに大村智先生とお話する機会があった。アフリカなど多くの国々のために研究なさっている大村先生に、海外の人々に重きを置いたプロジェクトを実行するために最も重要なことは何か尋ねると、「自分1人じゃだめ。周りの人との縁や繋がりが大事」と仰っていた。人との繋がりがこそが成果を育む土台であり、人との繋がりに生かされていることを強調されていた。このお話から、1人で実行できることはあまりにも小さいことを再認識し、「新興国で教育」という大きな目標に対してどのようなポジションから関わるのか明確にする必要性を強く感じた。

※スウェーデン青年科学者連盟が毎年ノーベル賞週間に合わせて開催するセミナーで、公益財団法人国際科学技術財団がノーベル財団の協力で、毎年2名の学生をストックホルムに派遣し、世界各国から派遣された若手科学者との交流やノーベル賞授賞式など諸行事への参加、自身の研究発表を行う。



大村智先生とともに

「科学技術」と「教育」という軸

もし教育論を究めたとしても、新興国では周囲の環境に制限されて、その教育にアクセスできない子供たちが数多く存在する。そのような新興国の教育を整えるために、科学技術を用いて社会全体の基盤づくりから携わることで、誰でも教育にアクセスできるようにしたいと考えた。これが、「科学技術」と「教育」の2つの軸を究めようとした理由である。

そのような夢を追いかけた活動を振り返ると、本庄国際奨学財団の皆様をはじめ、本当に多くの方々を支えられていたことを心から実感し、改めて人との繋がりの重要性を学んだ。これまでに得た気付きや学び、そして人との繋がりを大切にしながら、自らの信じる道に向けて一歩一歩進んでいきたい。



世界各国から25名の学生と、9日間ホストしてくれた現地大学生とともに

ハワイからの手紙



ミハイル・ロマンチュク (2015 UHプログラム/アメリカ)
Mikhail Romanchuk

ロシア・ウラジオストク出身。
2016年ハワイ大学マノア校金融ビジネス学部卒業。

日本の春2015 — 新しい文化に出会って —

4か月の日本留学

私はUH-Misawa Honjo Scholarship Programで慶應義塾大学へ2015年の春学期に来日し、本庄国際奨学財団の奨学生として様々なイベントに参加し、交流を深める機会を得ることができました。ハワイ大学では金融と国際ビジネスのダブルメジャーで専攻し、そしてこれは個人的な興味としてですが、ビジネスレベルの日本語習得をめざしています。前の学期に留学プログラムを探していた時、日本への留学は馴染みのない場所で自分の強さや弱さと向き合うことができるだけでなく、今後社会へ出る準備としてためになる経験だと思いました。この留学中に様々な挑戦とそれを克服した経験がなければ、私の目標は達成されることはなかったと思います。そして、この経験はこれからの私の人生に間違いなく影響するものでした。

銀行口座開設に四苦八苦

何よりも先に克服すべきハードルとして掲げたものは、「日本のやり方」で物事を感じ、対処するという事です。日本では、たとえ他にどんなに効率的なやり方が存在していても、まだよく知られていなかったり、成功が保証されていない段階では、誰もがよく知っている既存の方法を選びがちです。これは日本で銀行口座を開設したときにとても強く感じました。そのころ、私の日本語は、ある程度の手続きは簡単な会話で十分こなせると思っていました。注意深く聞きさえすれば、窓口の人の話す日本語についていくことができるし、窓口の人は外国人の対応によく慣れているだろうと思っていました。ところが、銀行口座の開設のための書類作成がこんなにも面倒だとは思ってもよませんでした。説明はよくわかるのですが、ほんの小さな字の書き間違いでも、間違った箇所のすべてに、私自身が訂正をしたということを示すために、サインと4ケタの暗証番号を記入させられました。書類を3回も書き直してようやく奨学金を受け取るための外国人専用の銀行口座を開設することができました。日本の企業の緻密性については敬意を持っていましたが、今回の件ではそれに対して批判的にもなりました。しかし同時に私のような面倒なお客に対してでも真摯な態度で接してくれたプロフェッショナリズムに感謝もしています。

「すみません、働いてもいいですか」

最も困難だったことは、まだまだ日本語を学んでいる段階であること、そして間違った言葉の使い方をすることが多々あるということに認めることでした。頭の中で考えたことを口に出してみると、音は似ているのに意味が全く異なる言葉を使ってしまったりもありました。例えば、「払って」と言いたいのに「働いて」と言ってしまうように。ある時、回転ずしの店で店員さんに「すみません、働いてもいいですか」と言ってしまったのです。店員さんも私も大混乱。結局「お金を払いたい」ということを何とか伝えてわかってもらったのですが、お店を出るときには自分に腹が立って仕方がありませんでした。この夜のことは私の中に長く残り、公衆の面前で初歩的なミスをするなんて、なんて馬鹿なんだろう、と思ってしまう。その他には、敬語体と普通体を間違えて

場にそぐわない言葉で会話してしまうこともありました。敬語体はそれほど親しくない知り合いと話すときや、上下関係のある人との会話の中で使われます。一方普通体は友人や家族と話すときに使います。間違った言い方をすることは、自分の日本語がどれだけ未熟かを披露するにすぎず、何よりも笑いのみにされてしまうことがとても嫌でした。ですが、そんな自分を受け入れ、間違いを少なくしていく努力を続けました。そうしているうちに、日本で生活をしていくことにも自信が持てるようになり、それと同時に日本の文化を更に楽しめるようになりました。

日本留学で学んだこと

また、本庄国際奨学財団の一員となり様々なバックグラウンドをもつ学生と交流をもつことができました。ほぼ7大陸全ての地域から日本へ渡り、環境や習慣も全て異なる地で学位取得を目標とする学生達と財団主催のイベントや水ボラに参加し、この国のグローバル化を肌で感じました。さらに留学生たちと日本の文化と一緒に体験しながら、どうやって文化に溶け込むか、またさまざまな国の複雑な状況をよく理解するにはどうしたらよいかを日本に居ながらにして学ぶことができ、親近感も湧きすぐに仲良くなることができました。

一言でいうと、日本は私を「賢明な」、そして「文化的な」人間に変えたと言ってもいいと思います。また専攻している金融学や日本のビジネス環境の基礎的な知識を得ることに加え、日常生活の中で関わる人々とのやりとりを通じてアメリカとの違いを感じながらも、今自分もつ全ての情報をフルに活用し1つ1つのタスクをこなしていくことで、この国の文化に触れ、慣れ親しむ貴重な機会を楽しむことができました。更に、世界の様々な国から来た友人ができ、広大なネットワークとなりました。彼らは私にそれぞれの国の価値観や考え方について教えてくれました。そして日本というとてもユニークな場所に住むことで、初めて自分がアメリカ人であるということの意味について真に理解することができました。



岩手県陸前高田市で東日本大震災復興ボランティア活動に参加

ニューヨークからの手紙



藤谷 謙司 (2015 JMSAプログラム奨学生/アメリカ)
Kenji Fujitani

兵庫県出身。
マウント・サイナイ・アイコン医科大学医学部6年生。

アメリカの医学部教育と日本

私は医科大学入学の為にニューヨークに来て以来、米国日本人医師会 (JMSA) と共に数々のプロジェクトに関わらせて頂きました。昨年行ったプロジェクトの中から、シャドーイングとメンターシッププログラム、そして慶應義塾大学と慈恵医科大学でさせていただいた診療研修について、報告させていただきます。

「シャドーイング」とメンターシッププログラム

JMSAのシャドーイングプロジェクトは、高校生、大学生、医学部生、研修医、研究員を対象としたトレーニングプログラムです。昨年開始されたばかりで、このプログラムの運営、発展に努めてきました。このプログラムの発足動機ですが、私自身、高校、大学在学中にシャドーイングさせて頂く医師、病院をみつけるのに大変苦労した事があります。特に異国で紹介者のない留学生がシャドーイングさせて頂く医師をみつけるのは難しいと思います。それに医師をはじめとする医療従事者を志す学生達も、医療現場や医療従事者が実際に日々どのような事を行っているのか、十分には理解していないのではないかと感じました。学生達は、医者に求められる大きな責任などを十分理解した上に自分の将来の展望を考え、進学を決めることが大事であると思います。しかしながら、最近では患者さんのプライバシー保護の動きや病院の規則が厳しくなっているため、不可能ではないにしても、シャドーイングをする機会が益々希有になってきています。一方、日本からの留学生にそのような機会を与えることは、日米の医療従事者の良好な関係構築に繋がると考えられます。

私がJMSAシャドーイングプログラムを始めた当初は、マッチングシステムがニューヨークに限られていましたが、現在はデトロイトやシカゴにも拡大しています。私の目標は、このプログラムが米国中に広がり一人でも多くの人を支援することです。今年更に、メンターシップとアドバイスの要素を加え「JMSA Shadowing and Mentorship Program」と名前を変えました。シャドーイングプログラムに加え医療従事者を目指す高校生、大学生、留学生、医学部生を多方面に支援するという要素を加えました。なぜなら、年々医学部受験は、競争が激しくなっています。受験生にとって、受験前の大切な時期に勉強や試験のアドバイスしてくれる人や進路決定の為に色々相談に乗ってくれる人はとても大切な存在です。しかし、学生がその様な方を見つけるのは容易ではありません。そこでJMSAの医師や医学生にメンターとしてアドバイザーになって頂き、学生たちをサポートするという要素を新しく加えました。メンターシップの要素を組み込むにあたり、より良い信頼関係が得やすいメンターを探せる様に、以前私が作ったシャドーイングプログラムの質問項目を増やし改良して、再調査させて頂きました。また医療従事者からメンターやアドバイザーのボランティア募集の継続に努め、このプログラムの参加を希望する学生が、どのようなサポートを望み、私達がどの様な事を支援できるか、学生達と一緒に考えてきました。学生達は実際に医療現場を体験するシャドーイングや医療従事者から体験談などを直接聞ける経験を活かし、将来の夢に向かい前進することができます。来週もJMSAメンターシップアドバイスプログラムの一環で、進路決定の手助けをするために大学進学準備をしている学生と御両親に会う予定です。

※医療現場等で先生の後を影のようにして回り勉強する事。

日本での診療研修

最近日本との関わりを持つ活動が多くなってきました。慶應義塾大学と慈恵医科大学での国際交換診療プログラムから戻ってきたばかりです。私の目的は日本の医療システムや医師国家試験について勉強するだけでなく、両大学の教授、医師、学生と新しくコネクションを持つことです。米国に来ることに興味のある人達の助けになり、日本の次世代の医師と価値あるコネクションを築きたいと思っています。このように日米の関係を強化し、情報共有が少しでも容易になることを願います。そしてJMSAのシャドーイングとメンターシッププログラムが日本にも波及すれば嬉しいです。

研修の間、慶應義塾大学、慈恵医科大学のいずれの教授も大変良く指導して下さい、様々な医療の現場を体験させて頂きました。入院病棟、外来、手術室、カンファレンス、そして放射線科、眼科、内科の総会学会にまで同行させて頂きました。研修以外でも研修医や医学生と親しく付き合わせていただき、ゼミ、飲み会、課外活動にも参加させて頂きとても有意義な研修期間を過ごすことが出来ました。

これらの経験を通じて私は日本語の医療専門用語をより多く学び、日米の医療システムの違いを勉強することができました。日米の主な違いをいくつか挙げてみると①日本の医療の多くの部門は縦割りであること、②日本の医療は質が高く、受診し易い、比較的安価であること、③日本では患者が医師の指導や勧めに従いやすいこと、④紹介状など、日本では医師同士のコネクションが重要であることなどです。日米の長所を取り入れ、短所を最小限にしながら、これらの知識を融合した医療システムを開発することが私の夢です。

私はマウントサイナイ医科大学から初めて慶應義塾大学と慈恵医科大学で研修致しました。これから、二つの大学間の関係をより密にできたらと思っています。特に慈恵医科大学出身でマウントサイナイ医科大学の助教授である大石公彦先生の御尽力により慈恵医科大学での研修がとてもスムーズに運ぶことが出来ました。今後、慈恵医科大学とマウントサイナイ医科大学間での正式な交換プログラムが立ち上げられれば幸いです。

最後に

この一年の私の活動が、どの様に社会貢献できたかを御理解していただければ嬉しいです。これはJMSAと本庄国際奨学財団の支援がなければ実現しませんでした。JMSAと本庄国際奨学財団のビジョンに敬意を表し、これからも私のように支援を必要とする学生に手を差し伸べてくださることを願ってやみません。



慶應義塾大学医学部眼科研修医たちと



鄧 本祥 (2006~2008 奨学生/台湾)
Deng Ben-Shiang, MD, Ph.D.

総合青山病院麻酔科副部長



千葉大学修了後、どうされてましたか？

2007年日本医師国家試験に合格し、2008年千葉大学大学院博士課程修了後、岐阜の松波総合病院で6ヶ月臨床研修医をしていました。その後台湾に帰国し、麻酔科医として復帰しました。2010年10月岐阜の松波総合病院に戻り、臨床研修を再開し、2014年度の日本麻酔科学会専門医試験に合格しました。急性期病院の松波総合病院では緊急手術が多く大変勉強になりましたが、体調を崩してしまいました。そこで、2015年3月に愛知県豊川市にある総合青山病院に転勤しました。ゆとりがある職場で少しずつ元気を取り戻し、麻酔科専門医として頑張っています。

麻酔科医師はどういう仕事でしょうか。

有害な刺激から離れて命を守る本能というストレス応答(stress response)は循環、呼吸、代謝、行動など様々な変化を引き起こします。手術に伴う痛みや恐怖は身体にとっては重症な外傷と同じように命を脅かすものとしてストレス応答を起こします。しかし、手術による痛みに対する血圧の上昇や体の動きは過剰な反応であり、麻酔科医はこうした不利な反応を和らげる医療プロです。麻酔薬は命の力を抑えがちなので、麻酔科医は適切な麻酔方法を選択し、必要最小限の麻酔薬を

使い、手術のストレスに耐えられるようにバランスを保っています。今の病院では行っていない術式があり、麻酔科医としての技術を維持するために、1週間に一度、「師匠」のいる病院で勉強させてもらっています。

大学院で勉強したことは役に立っていますか？

「ストレス応答」が大学院での研究テーマでした。それは基礎研究で今の仕事と直接つながっていませんが、最近その時の知識が仕事とつながることがあり、日本で留学してよかったと思います。日本留学後台湾に戻った時は、若い人たちと一緒に麻酔科研修をし、日本に戻った時も(2007年3月千葉大学博士3年目の終わりに医師国家試験合格)再び研修医から始めたので、一人前になるまでに時間がかかり回り道をしたと思いますが、優秀な先生や親切なスタッフたちに恵まれて、努力を続けてきてよかったと思っています。

これからの目標は？

後輩を指導する立場にもなってきましたので、管理のことも病院で学んでいきたいと思っています。指導することも自分の成長のために大切なことだと思います。



松山 武・オジョス (2008~2009 奨学生/コロンビア)
Matsuyama Hoyos Takeshi, Ph.D.

理化学研究所 多細胞システム形成研究センター



神戸ポートアイランドにある理化学研究所、複数の病院と研究所がつながった、近未来のような環境ですね。

私も2015年4月にここにきましたが、複雑な建物構造にまだに慣れません。でも研究をするには大変良い環境です。

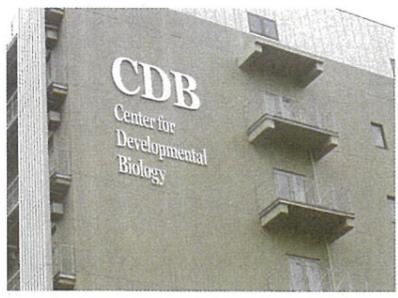
iPS細胞を使った網膜再生プロジェクトの世界的に有名な研究室ですが、どういう経緯でこちらの一員になられましたか？

京都大学では、目で光を受容するたんぱく質の研究をしていました。人は意識的に色や形を知覚する結像形成の視覚の他に、無意識に光を感じる非結像の視覚があることが最近の研究で分かってきました。たとえば私たちは昼夜のリズムに合わせて活動し、時差がずれても光を感じることで体内時計を合わせています。また冬季うつ病というのがあって、暗い状態が長く続くと精神状態に影響が出ることもあります。そういった無意識な視覚のメカニズムを解明したいと思っています。そして私の専門はES/iPS細胞ではありませんが、網膜再生プロジェクトに私の専門が役に立つということで、採用されました。この研究室には眼科医が多いので私も新しく勉強しなければいけないことがたくさん

ありますが、今注目されている研究室で、仕事をさせていただいて大変光栄です。

休みの日には何をしていますか。

今は西宮市に住んでいますが、留学時代を過ごした京都が大好きで休日にはしょっちゅう京都に出かけます。お寺を拝観したり、鴨川べりを歩いたり。妻は文部科学省の奨学金で来日した時に知り合ったルーマニアの女性で、もうすぐ第一子が生まれます！



サンドラ・ミレーナ・プエンテス (2008~2010 奨学生/コロンビア)
Sandra Milena Puentes, Ph.D.

筑波大学理工学群システム情報系



いつから筑波大学に？

2年前に筑波大学のサイバニクス*研究所の研究者として初めて来ました。私の専門は脳神経外科ですが、脳こうそくなどで身体が麻痺した人のリハビリを支えるロボットスーツなどを開発する研究所で、医学の視点から研究に参加しました。

そして2015年7月に工学部システム情報系の助教となり、9月から工学部の学生に授業をすることになりました。医学部の出身ですので、工学部の学生に何を教えるのか、悩みましたが、脳が身体の動きを命令する仕組みなどを教えました。おかげさまで学生さんからは「面白かった」といい評価をいただきました。4月からは手術支援ロボット「ダビンチ」に関する授業も担当しています。

研究はどんなことをやっていますか？

サイバニクス研究所と同様に現在の研究室でも動物実験をおこなっています。今はマウスを使っています。首の動脈から管を入れて、管からシリコン製の血栓状のものを入れて脳こうそくを起こし、薬剤を入れます。DDS(ドラッグ・デリバリー・システム)といって薬剤を患部に直接

届ける研究も行っています。

私は実験が大好きです。医師として臨床も大切ですが、両方することを難しい。研究に集中して、正しいデータをきちんととり、いい論文を書きたいです。

これからの夢は？

私は脳神経の専門家として、脳の病気を、患部だけを見るのではなく、脳内環境全体の改善が大切だと思っています。まだまだ多くの研究と勉強が必要ですが、20年後には脳疾患治療が大きく変わってほしいし、そのために努力を続けたいと思います。

※サイバニクス

サイバネティクス、メカトロニクス、情報科学を中核として、ロボット工学、脳・神経科学、IT技術、感性・人間工学、生理学、社会科学、倫理学など、人・機械・情報系が融合複合した新領域。(筑波大学山海研究室ホームページより抜粋)



アンドリュー C. エリオット (2010~2011 奨学生/イギリス)
Andrew C. Elliott, Ph.D.

同志社女子大学国際教養学科准教授



同志社女子大学にはいつから？

京都大学終了後、最初は同志社女子大学英語英文学科で英語と英米文学を教えていて、3年前から国際教養学科にきました。在学中に留学をしなければいけない学科で、国際関係と日本文化の授業を英語で行っています。大学は学生の面倒をこまめにみる教育方針で、教員は非常に忙しく、残念ながら今のところ研究には十分な時間が割けていません。

これからやりたい研究は？

大学院で行っていた異文化接触あるいは旅行記の研究は、これからも続けていきたい。その中にイザベラ・バード*についての研究も続きます。先日東京大学英語英文学研究部のSteve Clark教授が主催した研究会に出席して久しぶりに(!)イザベラ・バードの世界に触れて、楽しかった。彼女はイギリスではあまり知られていませんが日本ではよく知られています。日本人の書いた彼女に関する本も多く出ていますので、これから「Studies in Travel Writing」というジャーナルのために日本ではバードがどのように受け取られたかを検討します。あとは、やりたい研究テーマは「ベリー来航とポップカルチャー」です。ベリー来航は日本の歴史にとって大きな出来事で、アニメだけでなく、日本の「ポップカルチャー」で様々な表現されている。日本人にとっての「ベリー来航」とポップカルチャーの発展について研究したいです。

明治時代に一気に西洋化に傾いた日本と英国を比べてどう思いますか？

日本だけが特別とは思いません。私の生まれたイギリスでも、産業革命によって古いものをどんどん捨ててしまったという喪失感が生じました。もちろん実際に、社会変化が激しかったが、ともに大きなパラダイム・シフトもありました。つまり、近代化がなされると、昔のことを思い出して失われようとするものを復活させる動きが出てくる。「伝統」とは、近代化が達成されたときに、古いものを懐かしむために作られるものではないか、とも言われています。

今の大学生に期待することは？

いま学生を主に英語研修のためですが海外留学させて、現地で中国や韓国の学生と仲良くなるのはとてもいいことですね。お互いにいろんなことを感じて勉強してほしい。

※イザベラ・バード(1831-1904)

英国出身の旅行家。戊辰戦争のあとが残る東北地方を旅行して(当時彼女は47歳だった!)「日本奥地紀行」を著す。



阿部 雄一 (2010-2012 奨学生/日本)
Yuichi Abe, Ph.D.

国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所

SENPAI!
インタビュー
5

今はどういう研究をしていますか?

抗がん剤の効果予測が今の仕事です。病院からがん検体をもらってがんモデルを増やし、抗がん剤の効果をタンパク質の網羅的解析(プロテオミクス)の手法で調べます。抗がん剤は人によって効かない場合があります。その効果を見分けるための目印をコンパニオンマーカと呼びます。我々の仕事は、新しいコンパニオンマーカを1つでも多く見つけてオーダーメイド医療を進展させていくことです。抗がん剤の効果がなくとも副作用は出るので、患者さんにとって負担が大きく治療が遅れることが一つの問題点。さらに抗がん剤は高価なので国が負担する医療費も大きくなります。効果的な抗がん剤を治療の初期から正しく選択することがオーダーメイド医療の目的の1つとして重要になってきています。

大学院の時の研究とはだいぶ違うようですが。

京都大学の大学院ではウィルスの基礎生物学的な研究でしたが、

今はカラダの中のタンパク質を化学的な方法で解析しています。研究対象・研究方法もガラッと変わって新しく勉強しなければいけないことだらけですが、社会に直接還元できる応用研究ですので大変やりがいがありますよ。今は遺伝子レベルでオーダーメイド医療の研究が進んでいますが、一方で遺伝子だけでは説明できない部分も明らかになってきています。そのため、タンパク質レベルの解析にも注目が集まり始めており、私もその波に上手く乗りたいですね。

これからの目標は?

大学院時代、同じ分野で研究をしていた妻は現在ドイツに留学しています。ですので、チャンスがあれば海外留学も視野に入りたいですね。また、この研究所に来て応用研究に携わらせていただき、学問のための基礎研究だけでなく、社会への還元を目標に見据えた仕事の進め方も勉強させていただきました。そのため、大学発の成果を産業界に還元していければと考えています。



李 映昊 (2007-2008 奨学生/韓国)
Young-Ho Lee, Ph.D.

大阪大学蛋白質研究所講師

SENPAI!
インタビュー
6

大阪大学蛋白質研究所はどういうところですか?

大阪大学の吹田キャンパスは、大学というよりも病院を含め研究所が多いところ。様々な研究室棟が多くあり、研究者たちが時には頭を抱えて歩いています(笑)。蛋白質研究所は、蛋白質の基礎研究を通じて生命活動の原理を明らかにすることを使命として、1958年に大阪大学の理学部と医学部が母体となって創設されました。化学、物理学、生物学、医学の研究者が集まり、学際的な場で斬新なアイデアを競い合う素地が当初からありました。蛋白質研究所は、蛋白質研究における世界トップレベルの研究所であり、蛋白質研究のための優れた設備が揃っています。特に、世界最高感度をもつ溶液核磁気共鳴(NMR)分光法の設備がありますが、私は数年間、この設備の管理者として日本国内と海外の研究者のために測定・解析のサービスを提供していました。それ以外にも、世界に三つあるプロテインデータバンクの一つであるPDBの韓国版を担当しています。

今どんな研究をしていますか?

数万種類の蛋白質が、各々の機能を発揮することにより生命現象が維持されています。しかし、蛋白質自身の不安定性のために、機能の消失とともに蛋白質が集まって、アミロイド線維あるいは無定形凝集体のような大きな凝集体を形成します。蛋白質の凝集体形成は、高温で卵が固まることと同じ原理で起こり、40種類以上の深刻な病気を引き起こします。代表的な疾患としては、アルツハイマー病、パーキンソン病、二型糖尿病、狂牛病などがあります。腎臓の機能が低下した人は透析を受け

ますが、この透析によって透析アミロイドーシスという病気が引き起こされることがしばしばあります。病気を治すとともに新たな病気になってしまうジレンマになります。私の大きな研究フォーカスの一つは、蛋白質の不安定化の原因・機構、不安定になった蛋白質が病気を引き起こす凝集体になる機構、凝集体の構造、および凝集予防に関してです。これら以外にも蛋白質の物性、酵素を用いた生化学、蛋白質の他分子間との相互作用、および分析化学に関する研究も行っています。

新しい発見がありましたか?

蛋白質の凝集形成を阻害するものとして、カテキンに注目しています。カテキンが含まれてある「おーいお茶」をアルツハイマー病の原因蛋白質にかけるだけで、アミロイド線維形成が見事に阻害されることを、蛋白質レベルの実験から証明しました。細胞・個体レベルの実験に比べ、蛋白質レベルの研究は再現性の高い結果を短時間で得られるというメリットがあります。

これからは?

長く大阪大学にいますので、そろそろ自分の研究室を持ちたいと思っています。昨年からいくつかの大学に応募しています。大阪大学で博士号をとったばかりの妻は東京が大好きですので、近いうちに東京に移住するかもしれません。そのときには当財団の集まりにも参加できるように頑張りたいです。

温故知新

懐かしい再会に心ふるわせ、
一方で本庄ファミリーの新しいネットワークが広がっています。

来日の際に財団を訪ねてくださった方、
帰国の前に改めて訪問して下さった方、ありがとうございました。

現役奨学生がスリランカ旅行の際に
初代奨学生にお世話になりました。
財団設立20年の歴史を象徴する1枚です。



左: アマラサナー・ジャザグ(モンゴル)



右から2人目: ニコール・チュン(マレーシア)



スニール・ナワラトネ
(スリランカ)

久野 恭平
(東京工業大学)



左から2人目: ゲン・バオ・ゴック(ベトナム)



左から2人目: ブイ・ティ・キム・リ(ベトナム)



アグス・サントーサ・スジョノ(インドネシア)

日本人大学院生が
スタンフォード大学で
海外留学奨学生に
お世話になりました。

歌舞伎鑑賞会で
久しぶりにお会いした
1期生です。



五十嵐 敬幸
(東北大学)

笠原 晃恭
(スタンフォード大学)



Facebookに参加しよう!

Honjo International Scholarship Foundationのグループアカウントで財団からのお知らせや、本庄スカラーからの研究・仕事に関する情報、国の情報、プライベートでの活動の情報、質問、募集、意見などを活発に発信・交換しています。ぜひリクエストを送ってください。

<https://www.facebook.com/groups/HISFhonjo/>



名簿の作成にご協力ください!

20周年記念国際シンポジウムの参加登録と合わせて、名簿を作成しています。下記のサイトから“My Page”ログインページにアクセスできます。IDとパスワードは、事務局へお問い合わせください。

<http://www.hisf.or.jp/20anniversary/>



この機関誌の作成にあたり、ボランティアでところよく英文翻訳をしてくださったLi Jen Chenさんに心より感謝いたします。そして素晴らしい文章を寄せてくださったみなさまに感謝申し上げます。

1年間の活動

2015年3月～2016年3月

1 オリエンテーション合宿

2015年4月12日～13日

グレートアイランド倶楽部にて、初のオリエンテーション合宿を行いました。故本庄正則会長が財団設立に込めた思いを、チーム対抗の宝探しになぞらえて探していただきました。



2 博士論文発表会博士・修士論文発表会

2015年5月26日

2015年3月に学位を取得した4名による博士・修士論文発表会を開催しました。



3 静岡研修旅行

2015年6月19日～20日

伊藤園の中央研究所、浜岡工場、ペットボトル飲料製造工場を見学しました。



4 福島ツアー

2015年7月4日～5日

10期生の河東賢さんと韓国の大学のゼミ生が福島大学で東日本震災と福島原発の問題を勉強するツアーを特別に開催しました。

スペシャル



5 第9回HISFワークショップ

2015年7月5日

講演「天然資源と紛争のダイナミクス」講師：渡辺美湖



6 東北水ボラ研修旅行

2015年9月25日～27日

オハイオ大学、岩手県立大学と共同で東日本大震災復興支援ボランティア活動をおこないました。



7 BBQと国際料理大会

2015年10月24日

秋空の下、各国料理とBBQを楽しみました。



8 食と健康研究成果報告会

2015年11月6日

2014年度食と健康研究助成金受賞者による研究成果報告会を開催しました。



9 八戸ツアー

2015年11月29日

東日本大震災復興ボランティア活動(水ボラ)のあと、みちのくトレイル(八戸・種差海岸)を歩きました。

スペシャル



10 第10回HISFワークショップ

2015年12月6日

講演「日本のリケジョ」講師：小館尚文



11 忘年会

2015年12月28日

京都大学の小松リチャード警さんによる「クイズiPS細胞」で盛り上がりました。



12 台湾同窓会

2016年3月19日

台北で同窓会を開催し、台湾出身のOB/OGが旧交を温めました。



13 歓送迎会

2016年3月29日

コロンビア出身のラウラさんのラテンのダンスにみんなが魅了されました。



14 水ボラ

2015年度も東日本大震災復興ボランティア活動を14回行い、陸前高田市内の50か所以上の仮設住宅を訪問しました。



19年間の軌跡

Journey of 19 years

1期生から19期生まで思い出の写真を集めました。

懐かしい顔が見つかりますか？

Pictures from 1997-2015.
Find someone looks familiar!!



1997年11月4日

懇親会
伊藤園本社議室

November 4, 1997
The annual party
at Itoen head office building



1998年12月10日

忘年会
伊藤園本社議室

December 10, 1998
Year-End party
at Itoen head office building



1999年7月19日

静岡研修旅行
浜岡工場

July 19, 1999
Shizuoka trip
at Itoen Central Research
Institute

2000年6月28日

懇親会
伊藤園本社議室

June 28, 2000
The annual party
at Itoen head office building



2001年3月30日

歓送迎会
青山ダイヤモンドホール

March 30, 2001
The annual party
at Aoyama Diamond Hall



2002年3月29日

歓送迎会
センチュリーハイアットホテル

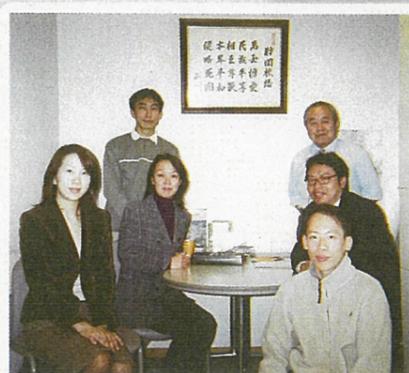
March 29, 2002
The annual party
at Century Hyatt Hotel



2003年9月5日

静岡研修旅行
忍野八海

September 5, 2003
Shizuoka trip
at Oshino Hakkei



2004年3月某日

財団事務所で

March 2004
In Honjo International
Scholarship Foundation office



2005年12月某日

忘年会
東天紅東京オペラシティ店

December 2005
Year-End party
at Toh Ten Koh Operacit



2006年3月某日

歓送迎会
センチュリーハイアットホテル

March 2006
Welcome and farewell party
at Century Hyatt Hotel



2007年7月7日

静岡研修旅行
伊藤園浜岡工場

July 7, 2007
Shizuoka trip
at Itoen Hamaoka Factory

2008年6月6日

静岡研修旅行
伊藤園浜岡工場

June 6, 2008
Shizuoka trip
at Itoen Hamaoka Factory



2009年5月17日

博士論文発表会
国立オリンピック記念青少年センター

May 17, 2009
Doctoral Dissertation
Presentation Program
at National Olympics
Memorial Youth Center



2010年6月18日

静岡研修旅行
伊藤園中央研究所

June 18, 2010
Shizuoka trip
at Itoen Central Research
Institute



2011年9月27日

懇親会
ハイアットリージェンシー東京

September 27, 2011
The annual party
at Hyatt Regency Tokyo



2012年3月28日

歓送迎会
ハイアットリージェンシー東京

March 28, 2012
Welcome and farewell party
at Hyatt Regency Tokyo



2013年3月27日

歓送迎会
ハイアットリージェンシー東京

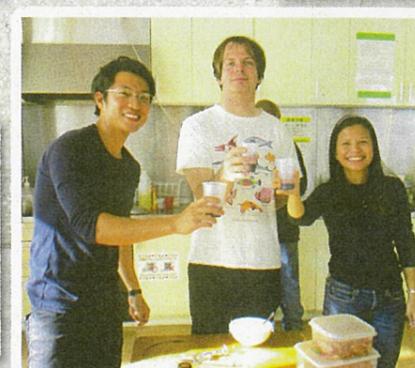
March 27, 2013
Welcome and farewell party
at Hyatt Regency Tokyo



2014年10月17日

スポーツ大会
国立オリンピック記念青少年センター

October 17, 2014
Sports Exchange Program
at National Olympics
Memorial Youth Center



2015年10月24日

BBQと国際料理大会
東京国際交流館

October 24, 2015
BBQ and International Food
Exchange Program
at Tokyo International
Exchange Center